

研究 成 果 報 告 書

(ふりがな) (いしの きみこ)

氏 名 石野 公子

所 属 妙高市立新井小学校 教諭

平成13年3月修了 障害児教育専攻

○研究のテーマ 小学校低学年における特別な支援を要する児童への手立て
ー放課後スキルアップの取り組みを中心にー

○研究の概要及び成果

発達障害や、その疑いのある児童に対しては、校内組織体制の整備を行い、複数の教員がチームで支援することが大切である。その際、特別支援教育コーディネーターの役割が重要となる。多忙な学校現場では、生徒指導部や学級担任と連携し、低いコストで即効性のある手立てを講ずる必要がある。そこで本研究では、平成23年度からスタートした低学年向け放課後スキルアップの成果と課題を整理した上で、効果的なスキルを検討・実施しながら学年部に広げていく取り組みを行った。

今年度の放課後スキルアップは、1年生15名と2年生7名の合計22名で、2・3学期の毎週木曜日に行った。支援する教師は2名である。また、参加回数は少なかったものの、特別支援学級に在籍する高学年児童をサポートとして活用し、「静かにカード」を提示したり、振り返りカードに漏れ落ちがないか確認をしたりするなどの役割を遂行した。昨年度に引き続き、アンケートで本人のニーズならびに保護者のニーズ、保護者の悩みを書いてもらい、担任所見も参考にして活動内容と目標、手立てを設定した。1時間の中で前半は学習、後半はゲームをとおして姿勢や拳手の仕方、ルールを理解して守ること、勝ち負けを受け入れること、相手の目を見て話したり聞いたりすることなどを目標として取り組んだ。昨年度の反省から、活動をパターン化し見通しを持たせたところ、逸脱する児童が減った。また、相互評価や他者評価を取り入れることで、甘くなりがちだった自己評価が次第に客観的になってきた。今年度は3つのグループに分け、2年生をチームリーダーとして、整列や司会などの役割を与えた。「緊張したけれどリーダーは楽しい」と書く児童がいるなど、生き生きと活動する児童が多かった。また、子ども同士が助け合う集団随伴性が見られたことから、ゲームそのものは変えずに活動の一部や目標設定を少しずつ高度にした。風船バレーでは、「失敗した人を励ます」という目標設定をし、具体的にどのような言葉がけをするか質問したところ、次々と手が挙がり良い意見が出た。全校で取り組む異年齢集団活動でも、風船バレーが取り上げられるなど仲間作りとして有効であった。ゲームの説明には、多くの視覚的支援だけでなく、視覚・聴覚を合わせた支援をしてきた。しかし、指示の聴き取りに困難さを感じる児童が複数いたため、数字聴き取りゲームを前半に取り入れた。全員が集中して取り組める活動であり、通常学級でも有効であることが実感できた。また、極端に聴き取りが不得意であった児童については、その特性と対応策を学級担任に伝えることができた。